

ンが円滑に図られていくことが、キーポイントになるのではないかとこの仮説を立て、研究を進めていくこととした。

B. 研究方法

上記の目的を達成するために、3年計画の初年度には、わが国の性意識、性行動の現状把握と合わせて男女間、親子間のコミュニケーションが図られているかどうかを探るための調査（「男女の意識と生活に関する調査」）の実施、「男女間のコミュニケーション・スキルの向上」に関連する国内外の先行研究論文の収集と分析、性教育・性指導の現状と今後の課題という3つの研究を並行して実施した。

(1) 「男女の生活と意識に関する調査」

個人のプライバシーに十分留意しつつ、層化二段無作為抽出法をいう調査手法を用いて、2002年10月1日現在満16～49歳の男女個人3,000人を対象とした調査を実施した。その結果、1,572人（男性675名、平均年齢34.0±9.5歳、女性897名、平均年齢35.5±9.5歳）からの回答が得られた（回答率52.4%）。

層化とは、まず、①全国の市区町村を都道府県を単位として以下の11地区に分類し、さらに、②各地区においては、都市規模によって大都市、人口10万人以上の都市、人口10万人未満の都市、町村という4層に分類することである。その上で、地区・都市規模別各層における推計母集団数の大きさにより、それぞれ3,000の標本数を比例配分し、各調査地点の標本数が13～23になるように調査地点を決めた。

調査項目のあらまは、以下の通りである。

①日常生活や考え方（親子関係、日常生活と人間関係、家族関係、親に対する評価、初恋）

②性の意識や知識（性をテーマにした親子や友人との話し合い、許容される性交開始時期、性に関する学習開始時期、性感染症予防、低用量ピル、緊急避妊法の認知度）

③自身の性行動（セックスとは、性交経験、性交相手、性交までの期間、避妊や性感染症予防、コンドームの重要性）

④望まない妊娠の防止（避妊、人工妊娠中絶に対する意識と経験状況、中絶後のメンタルケア）

⑤セックス、避妊、性感染症など性に関するサービスの在り方

このように、性意識、性教育、初めてのセックス、親と子の関わり、妊娠、避妊、中絶、性感染症予防など、質問項目は多岐にわたっており、本研究を進める際の国民から寄せられた声として貴重な資料を得ることができた。また、国として初めて実施した性関連調査であること、50%を超える回収率が得られたことは異例とも言える。

(2) 先行研究論文の収集と分析

「男女間のコミュニケーション・スキル」を向上させる、あるいは阻害させる要因を探るために、国内外の先行研究論文を収集した。文献はデータベースMEDLINE（1967～）、Pro Quest（CINAHL Database with Full text, 1986～）、ネット検索などを活用して収集した。

F1 性別：男性

		問1 行動や考え方での影響（選択2つまで）											
		親	祖父母	きょうだい	それ以外の親族	近隣の人々	学校	友人	マスコミ	インターネット	宗教	この中ではない	不明
合計		60.6	4.7	10.1	3.1	2.5	8.4	44.7	16.1	1.0	3.0	8.1	0.9
F2 年齢	20歳未満	41.3	9.5	11.1	3.2	3.2	20.6	54.0	12.7	1.6	0.0	6.3	1.6
	20～24歳	58.1	4.8	8.1	1.6	1.6	11.3	58.1	14.5	3.2	1.6	6.5	0.0
	25～29歳	61.3	1.0	18.6	1.0	2.0	6.9	44.1	20.6	0.0	2.9	8.8	1.0
	30～34歳	61.7	5.6	11.2	2.8	2.8	5.6	44.9	15.0	0.0	0.9	10.3	0.0
	35～39歳	69.1	8.2	3.6	2.7	4.5	5.5	42.7	12.7	2.7	4.5	8.2	0.9
	40～44歳	62.1	2.4	11.3	3.2	1.6	8.1	41.1	18.5	0.8	4.0	8.9	0.0
	45歳以上	60.7	3.7	6.5	6.5	1.9	7.5	38.3	16.8	0.0	4.7	6.5	2.8

F1 性別：女性

		問1 行動や考え方での影響（選択2つまで）											
		親	祖父母	きょうだい	それ以外の親族	近隣の人々	学校	友人	マスコミ	インターネット	宗教	この中ではない	不明
合計		75.8	5.2	12.4	3.3	2.1	6.9	46.5	9.6	0.1	3.6	3.6	1.3
F2 年齢	20歳未満	54.8	2.7	13.7	0.0	2.7	17.8	61.6	15.1	0.0	1.4	5.5	0.0
	20～24歳	77.5	4.5	6.7	1.1	1.1	9.0	62.9	3.4	0.0	2.2	3.4	0.0
	25～29歳	82.3	7.3	13.7	2.4	0.0	4.0	50.0	4.0	0.0	1.6	3.2	1.6
	30～34歳	78.6	6.2	10.3	6.2	2.1	5.5	46.9	6.2	0.0	3.4	3.4	1.4
	35～39歳	78.2	3.5	12.0	5.6	2.1	7.7	43.7	12.7	0.7	4.2	2.8	0.7
	40～44歳	73.8	5.5	10.3	2.1	0.7	6.9	40.7	15.9	0.0	5.5	3.4	2.1
	45歳以上	76.5	5.6	17.3	3.4	5.0	3.9	36.3	9.5	0.0	4.5	3.9	2.2

(3) 性教育・性指導の現状と今後の課題

米国における禁欲主義教育などが話題になる中、わが国にあっては、早期性教育の在り方についての激しい議論が展開されるようになってきている。本研究班では、「早期性教育」「禁欲主義教育」の2つのテーマについて国内外文献の検索を行い、世界の動向を探ると共に、わが国で行われている性教育・性指導の現状と今後の課題についてその概要をまとめた。

C. 研究結果

(1) 「男女の生活と意識に関する調査」

本調査は、性意識、性教育、初めてのセックス、親と子の関わり、妊娠、避妊、中絶、性感染症予防など、質問項目が多岐にわたっており、「性」や「親子間のコミュニケーション」などを踏まえた母子保健施策を進める上での、貴重な資料を得ることができた。詳細は、本報告に譲ることとして、興味ある2、3の項目について以下に列挙した。

①行動や考え方で最も影響を受けたものは「親」

「行動や考え方で最も影響を受けたもの」を尋ねると、男女ともに「親」(男 60.6%、女 75.8%)、「友人」(男 44.7%、女 46.5%)の順であった。ついで男性が「マスコミ」(16.1%)、女性は「きょうだい」となっている。これを年齢で見ると、男性の場合、「親」を挙げる者が20歳未満では男女とも低い一方、年長者に比べて「友人」や「学校」の占める割合が高くなっている。「学校」あるいは「学校教育」などが「マスコミ」以上に、20歳未満の男女の生活や考え方に影響を及ぼしていることがわかる。

②普段、親子の会話はよく図られているが、「性」に関する話をする機会はほとんどない

「普段、親とよく話していたか」を問いかけると、「よく話した」と「時々話した」を加えて「話した」群では男性 87.0%、女性 91.5%と高率であり、親と子の断絶を感じさせるデータはなかった。とりわけ、「20歳未満」では男女ともに、それぞれ 60.3%、68.5%と他の年齢に比べて「よく話した」割合が多く、一方、「よく話した」が最も低いのは男女ともに「45歳以上」で、特に男性は 19.6%と驚く程に低い結果であった。日常における親子のコミュニケーションは、現代の方が図られている可能性が高い。その一方で、こと「性」の問題になると、「よく話した」「時々、話した」

の割合が激減し、男性の 7.0%、女性の 10.7%。「まったく話をしなかった」がそれぞれ 57.0%、47.0%であり、いかに「性」について日常的に話をするのが難しいかがわかる。その一方で、女性の「20歳未満」では 23.2%が「話した」と回答しており、親子のコミュニケーションという意味では、若い母親、娘関係では良好な印象を受ける。「性」がテーマであっても、親子の会話が図られている現代の若い女性が、母親となったときに、子どものような関わりが始まるのかとても興味のあるところである。

③セックスをいつ始めるかは本人の自由

男女ともに、セックスをいつから始めるかは「本人の自由」(男性 41.6%、女性 34.1%)を挙げている。これは、あたかも物わかりのよい親子の意見とも言えなくはないが、親子間でのコミュニケーションを図ることが面倒なので「適当に」という投げやりの姿も見える。年齢で比較すると、男性では、「経済的に親から自立してから」が30歳以上に多く、特に「45歳以上」では 31.8%に達していた。その一方で「中学校を卒業してから」が「20歳未満」(17.5%)、「20歳～24歳」(14.5%)と高く、「いつから開始するかは本人の自由」が「29歳以下」で高率であることなど、親の世代は「子ども」を思い、若い世代は「自分の行動の正当性」を主張しているようで興味深い。女性についても、同様な傾向が認められた。

④性や避妊方法の情報源、若い世代は「学校」

「性や避妊法などに関する情報源」を問いかけると、男性では「友人」(53.3%)と「マスコミ」(48.6%)が圧倒しており、次いで「教師、学校の授業」(26.8%)となっている。女性の場合、「教師、学校の授業」が 42.8%、「マスコミ」43.3%、「友人」41.6%と三者が拮抗している。年齢的にみると、男女ともに「20歳未満」のうち男性の 63.5%、女性の 69.9%が「教師、学校の授業」を挙げ、「友人」(男性 38.1%、女性 43.8%)、「マスコミ」(男性 27.0%、女性 28.8%)をはるかに凌いでいる。特に「教師、学校の授業」を挙げる回答者は年齢が下がるにつれ高いという結果であった。「性教育」が話題になって久しいが、若い世代での「教師、学校の授業」への期待と影響を考えると、今後さらに充実した性教育が、学校の授業などを通してなされていく必要がある。「45歳以上」の男女差は、「月経準備教育」が女性単独に行われていた結果なのだろうか。

⑤現在の避妊法、やはりコンドームと膈外射精

現在の主な避妊法について、男性では「男性

用コンドーム」が74.9%と最も高く、次いで「膣外射精法」13.1%、「オギノ式」4.0%、「基礎体温法」1.6%の順であり、「ピル」は皆無であった。これは初交時の避妊法と殆ど同じであるも、膣外射精法が初交時よりも多くなっていた。年代別でみて特に大きな変化としては40歳前半の避妊法として「膣外射精法」を行っている者が24.1%と比較的多くなっていた。男性が考えられる避妊法にはコンドームしかないとの結果が浮き彫りされた。女性の避妊法も同様に「男性用コンドーム」が主流で70.8%、「膣外射精法」15.1%、「基礎体温法」4.3%、「オギノ式」3.7%、「IUD」1.2%、「ピル」1.0%。ピルについては男性の答えが皆無であったことから、ピルが使用されていることについて、必ずしも相手に伝えていないことも考えられる。また、「女性用コンドーム」はわずか0.6%に過ぎなかった。女性が主体的に取り組める避妊法としては「女性用コンドーム」「低用量ピル」「銅付加IUD」などがあり、1999年後半から2000年にかけて承認され使えるようになってきたにもかかわらず、男性主導型の避妊法が選択の傾向を変えることができないのは遺憾である。

(2) 先行研究論文の収集と分析

①どのような視点で研究や検討を行うこと

が有効であるかを明確にするために、先行研究の文献にあたり、問題設定・因子・解決の方法について整理を行った。その結果、多様なスタイルでの「実施報告」は数多く存在するが、効果評価についての記載や検討は少ない。カテゴリー化を行うプロセスにおいて整理を試みた。

②母親と思春期の子どもとの性に関する会話がコンドームの使用やパートナーとの会話にどう影響するかを調査した興味深い文献を一例紹介したい。(Whitaker, D. J., Miller, K. M., May, D. C. & Levin, M. L. Teenage Partners' Communication About Sexual Risk and Condom Use: The Importance of Parent-Teenager Discussions. Family Planning Perspectives, 31(3), pp.117-121, 1999)

A) セクシュアリティや性的リスクに関する親子間の話し合いは、パートナーとの性についての会話を促進するが、それは親がオープンかつ上手に話しているときに限られる。同様に、親の反応性がいいときは、親子間の会話はコンドームの使用を促進する可能性がある。親子間の会話とコンドーム使用は、パートナーとの会話によって仲介されていなかった。→親子間の性に関する会話の内容とプロセスの両方を調査する重要性

HIVや他のSTD、妊娠を予防するには、親子

本調査結果と毎日新聞社人口問題調査会調査との比較

	現在実行している人を対象に（既婚女性）							現在と前に実行している人を対象に（既婚女性）				
	今回	25回	24回	23回	22回	21回	20回	19回	15回	10回	5回	1回
	2002	2000	1998	1996	1994	1992	1990	1988	1980	1970	1960	1952
コンドーム（男性用）	69.1	75.3	77.8	77.2	77.7	75.3	73.9	76.8	81.1	68.1	58.3	35.6
性交中絶／膣外射精	17.3	26.6	7.4	9.6	7.1	7.6	6.5	4.9	5.2	6.9	11.5	12.7
オギノ式定期禁欲法	4.7	6.5	8.4	8.1	7.1	9.2	7.3	6.6	23.1	33.9	40.4	27.4
女性不妊手術	3.1	5.3	4.6	5.3	5.8	5	7.4	5.8	2.9	-	5.4	-
基礎体温法	2.8	9.8	8.2	8.9	6.8	7.3	8	9.7	-	-	6.1	-
IUD	1.7	2.7	3.1	3.8	3.7	4.9	4.7	5.3	8.3	7.2	-	-
洗浄法	0.8	0.4	1.1	0.5	0.5	0.9	1.2	0.6	1.6	1	2.1	4.9
コンドーム（女性用）	0.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ピル	0.6	1.5	1.1	1.3	0.6	1.3	1	1.7	3.2	1.7	-	-
男性不妊手術	0.3	1.1	1.2	1.2	1.2	1.2	2.4	1.6	1.1	-	0.9	-
避妊薬（錠剤／ゼリー／フィルム）	0.0	0.5	0.8	0.5	0.8	1.2	1	0.5	-	-	-	-
無回答		2.4	2.6	2.6	3.1	2.2	2.5	2.7	1.2	-	4.2	10.7
バッサリー	-	-	-	-	0.2	0.1	0.3	0	1.1	4.3	7.4	7.8
ゼリー、フィルム	-	-	-	-	-	-	-	-	1.9	6.4	13.3	15.4
錠剤	-	-	-	-	-	-	-	-	2.3	7.8	7.2	14.2
スポンジ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0.3	1.5	-
その他（無回答）	10.9	-	-	-	-	-	-	-	1.2	3.8	1.1	4.3
不妊手術	*3.4	*6.4	*5.8	*6.5	*7.0	*6.2	*9.8	*7.4	*4.0	5.4	-	-

*は再掲 全国家族計画世論調査集計結果（毎日新聞社人口問題調査会）

間の性に関する会話を促進し、親に対してコミュニケーション・スキルを訓練するプログラムが効果的である。

B) パートナーとのコミュニケーションとの関連

セクシュアリティに関する会話×パートナーとのコミュニケーション：正の相関

リスクに関する会話×パートナーとのコミュニケーション：正の相関

反応性×パートナーとのコミュニケーション：正の相関の傾向はあったが、統計的有意性はわずか

C) 会話の種類とパートナーとのコミュニケーションとの関連は親の反応性によって仲介されるか

・セクシュアリティに関する会話

・パートナーとのコミュニケーションにおける性に関する会話の効果は、親の反応性によって異なっていた。

・親の反応性が高いときはセクシュアリティに関する会話とパートナーとのコミュニケーションとは有意に正の相関を示したが、低いときは相関が弱く有意差はわずかだった。

D) リスクに関する会話

・リスクに関する会話とパートナーとのコミュニケーションとの関連は、親の反応性によって異なっていた。

・親の反応性が高いとき有意に正の相関を示し、低いときに有意差はなかった。

E) 研究の限界

・子どもの回答から得たデータであり、調査する親の反応性の程度に限界がある。

・親の反応性の構成要素を精錬する必要がある。文献検索を進める中で、男女間のコミュニケーションスキルという視点から、「Examining communication and assertiveness as predictors of condom use」(Zamboni BD, et al)、「コンドームを使用するかどうか」という予測を語った資料があった。その結果、

・重回帰分析の結果、「性に関する自己主張はコンドームの使用を予測する」(寄与率6.13%)と低かった。

・コンドームに対する態度が肯定的なときのみ、コンドーム使用と性に関するコミュニケーションは正の相関を示した。

・対人間のコミュニケーションがうまくいっ

ていても、性的に自己主張が強いとは限らない。

・性に関わる自己主張がコンドームの使用を最も予測させる。(コンドーム使用のためにはセックスパートナーとのコミュニケーションスキルを学ぶべき)。

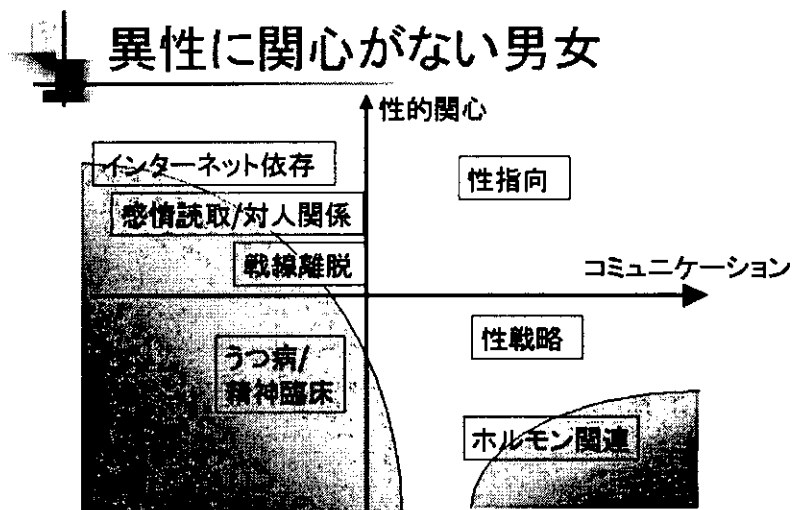
③コミュニケーションが取れない男女の存在

コミュニケーションが取れない男女は、男女交際からの忌避や晩婚傾向などに影響している可能性がある。そこで、異性に関心のない男女の存在について、それがどのようなバックグラウンドによって構成されているのかを考察した。

性への関心の有無をまず一つの軸として、また、コミュニケーションの良好さをもう一つの軸として、異性に関心のない男女の存在をマッピングすることを試みた。

A)性に関心があり、コミュニケーションが良好なもの：これらの主たるものは、性指向によるものと思われる。

B)性に関心がなく、コミュニケーションが良好なもの：性それ自体に関心がいつまでもわか



ないもの(ホルモンの分泌に関するバリエーションの一つだと思われる)

C)性に関する興味が今はなくともいずれ顕在化するもの：初産年齢の上昇にともなう生物学的な性戦略の一つだとも思われた。

D)性に関心があり、コミュニケーションが良好とはいえないもの：人との非言語コミュニケーションが苦手なもの(Dyssemia)

E)性に関心がなく、コミュニケーションが良好とはいえないもの：不登校やひきこもりに関するものやうつ傾向・うつ病が考えられた。

F)その他：男女交際をしはじめ前、もしくは男女交際をしはじめた後に経験する挫折により、その後男女交際を忌避してしまうもの。インターネットへの依存が強すぎて、現実生活に

適応できなくなるものが考えられる。米国ではインターネット中毒として、精神病理の一つとして扱われる方向にある。

(3) 性教育・性指導の現状と今後の課題

結論を急げば、節制や禁欲とともに避妊や性感染症予防についても教える、「包括的」性教育が、若者の性交開始時期を遅らせ、セック

ス・パートナーの数を減らし、望まない妊娠やSTDの感染率を減らすことに寄与し、「包括的」性教育が若者の性行動を活発化させる原因とはならないことが明らかとなった。

「結婚まで禁欲のみ」教育の特徴	「包括的」性教育の特徴
結婚外の性行動は、社会的、心理的、身体的悪影響を招くと教える	セクシュアリティは、自然で、普通、健康な人生の一部であると教える
結婚までは性交をしないことが、唯一の正しい行動だと教える	性交をしないことが、妊娠、性感染症の予防には最も効果的だと教える
すべての生徒にあてはまる、一つの価値観があると教える	家庭やコミュニティの価値観と共に、生徒が自分の価値観を模索して定義する機会を与える。
結婚前の禁欲と、婚前性行動のむくいとといった限定されたトピックを取り上げる	発達、関係、対人関係スキル、性的健康、社会、文化などのセクシュアリティに関連する広範なトピックを取り上げる
中絶、マスターベーション、性的指向については、全く取り上げないか、伝える情報が偏っている	中絶、マスターベーション、性的指向についても取り上げて、正確な事実を伝える
若者の性行動をコントロールするのに「恐れ」と「恥」にたよる	セクシュアリティと性行動についての明るいメッセージを伝えながら禁欲の利点も説く
コンドームについて「失敗率」のみが教えられる	コンドームを正しく使用することによって、望まない妊娠と性感染症（HIVを含む）のリスクを激減できることを教える
避妊法について「失敗率」のみが教えられる	避妊によって、意図しない妊娠のリスクが大幅に低減できることを教える
性感染症（HIVを含む）について、誇張された正確でない情報を提供し、性感染症は、婚前性行動の必然的なむくいだとする	性感染症（HIVを含む）について医学的に正確な情報を提供し、STDが予防できることを教える
特定の宗教的価値観を推進していることが多い	宗教的価値観は個人の性行動の意思決定に重要な役割を果たすことを教える。生徒1人1人に、自分自身と、家庭の宗教的価値観について模索する機会を与える
意図しない妊娠をしてしまったティーンにとって、倫理的に正しい決断は、赤ん坊を養子に出すことしかないと教える	意図しない妊娠に直面した女性には、妊娠を継続して自分で赤ん坊を育てるか、養子に出すか、妊娠を継続せず人工妊娠中絶をする、という選択肢があることを教える

D. 考察

「男女間のコミュニケーション・スキルの向上」が本研究班のメインテーマであるが、それ

を怠ることで人生に重大な禍根を残しかねない避妊や HIV・エイズを含む性感染症予防を例にしても、殊の外コミュニケーションがとられていないことが明らかとなった。

「男女の生活と意識に関する調査」によれば、

「初めてのセックス」の相手は、6,7割が「恋人」と答えるもの、「初めてのセックス」においてさえ、避妊実行率は6割に満たず、採られた避妊法は男性に主導権を握られたコンドームと陰外射精であった。一方、避妊できなかった理由を問いかけると、女性は「避妊を自分から出せなかった」といい、男性は「避妊具がなかった」と事も無げに答えている。最近の避妊についても、「よく話あって決めているか」には、半数以上の男女が「相談していない」とし、コミュニケーション不足が歴然となっている。

これは、HIV 予防などセーフセックスを例に、男女間のコミュニケーションの在り方について論じた国内外の先行研究でも確認されており、①sexual assertiveness (性的自己主張)と一般的な assertiveness は関係していないこと、②パートナーの否定的な反応を予測するためにコンドーム使用や避妊法について話ができない、③信頼関係が成り立つとセーフセックスについてあまり話し合わないなど、意識・感情面の影響が大きいと結論づけている。

親子のコミュニケーションに目を転じて、性意識・性行動調査で明らかのように、日常会話がとれている親子であっても、こと「性」を話題にした会話は驚くほどに激減するという結果であった。

親子間での性的なコミュニケーションを促進するものは同性の親子間でのコミュニケーション、親の性的な話に対するオープンさや肯定的な受け止めであることが先行研究によって指摘されているが、男女間のコミュニケーションの向上を図るには、親子の関係性を改善することが重要であることが示唆された。しかも、親から子への性教育は出生直後から始まることを認識し、「健やか親子21」国民運動の方針に沿って、妊婦への教育も充実させていく必要がある。

親が積極的に自己開示し、オープンに話をすることで、子どもが親の性に対する価値観・態度を学び、子ども自身が自分の性行動をコントロールできるようになるという関連性がみられたことは興味深い。特に、母親が性に対して肯定的なイメージを持っていることが、性に関する会話を促進させる要因であることが明らかになっており、子どもを対象とした性教育・

避妊教育・性感染症予防教育にとどまらず、親に対する教育、介入が重要であることが明らかとなった。

さらに、男女間の性に関するコミュニケーションを促すには、リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (性と生殖に関する健康と権利) の啓発と合わせ、感情に左右されずにコンドーム使用や避妊法について話すことを肯定的に受け止められるようなコミュニケーション・スキルを身につけていくことが必要であると言える。

今後は、「男女の生活と意識に関する調査」をさらに詳細に分析し、コミュニケーションが図られている男女、親子の背景などについて検討を加えるとともに、成功例や失敗例など個々の事例研究などを進めながら、男女間のコミュニケーション・スキルを向上させるためのマニュアルづくり、スキル・トレーニング法などを開発することに尽力したい。

E. 結論

望まない妊娠の増加や性感染症の拡大など、わが国のリプロダクティブ・ヘルスを脅している問題の解決のためには、単に避妊教育や性感染症予防教育を推進することに留まらず、男女間のコミュニケーションが図られることが重要である。しかし、男女間のコミュニケーションは一朝一夕に可能になるわけではなく、親自身の性に対する姿勢や態度、行動を変えるとともに、幼少時からの親子のコミュニケーションの促進、親から子への性情報の提供や教育をこれまで以上に推進し、また男女間のコミュニケーション・スキルをトレーニングしていく必要性が示唆された。次年度以降は、年代に応じた男女間のコミュニケーション・スキルを向上させるためのスキル・トレーニング方法を開発し実践していくことで、結果的に望まない妊娠や人工妊娠中絶、性感染症が減少することを期待したい。

これこそ、「健やか親子21」国民運動のめざす課題の達成を可能にするものであることを確信している。

「男女の生活と意識に関する調査」

北村邦夫（社団法人日本家族計画協会クリニック）

菅 睦雄（リプロヘルス情報センター）

佐藤郁夫（自治医科大学医学部産科婦人科学教室）

I 調査の概要

1. 調査の目的

以下の多岐にわたる項目について調査することによって、国民が「男女の生活」についてどのような意識をもって行動しているかなどを探り、今後の母子保健施策の参考とすることを目的に実施するものである。

なお、同様な調査は、毎日新聞社人口問題調査会が1952年以来2000年まで2年おき25回にわたって実施してきた「全国家族計画世論調査」やNHKが1999年に行った「日本人の性行動・性意識」に関する社会的な調査などがあるが、本調査を実施するにあたり参考とさせていただいた。

(1) 日常生活や考え方（親子関係、日常生活と人間関係、家族関係、親に対する評価、初恋）

(2) 性の意識や知識（性をテーマにした親子や友人との話し合い、許容される性交開始時期、性に関する学習開始時期、性感染症予防、低用量ピル、緊急避妊法の認知度）

(3) 自身の性行動（セックスとは、性交経験、性交相手、性交までの期間、避妊や性感染症予防、コンドームの重要性）

(4) 望まない妊娠の防止（避妊、人工妊娠中絶に対する意識と経験状況、中絶後のメンタルケア）

(5) セックス、避妊、性感染症など性に関するサービスの在り方

2. 調査対象

(1) 母集団 全国で平成14年10月1日現在満16～49歳の男女個人

(2) 標本数 3,000人

(3) 抽出方法 層化2段無作為抽出法（後述）

3. 調査期間

平成 14 年 10 月 31 日～12 月 4 日

4. 調査方法

調査員が調査対象者宅を直接訪問し、調査票を手渡し記入してもらった。記入済み調査票は、所定の袋に入れ、調査員が数日後回収に訪れた際渡すという方法が採られた。

5. 調査実施委託機関 社団法人 新情報センター

6. 調査完了数

標本数	3,000 (100.0%)
完了数	1,572 (52.4%)
不能数	1,428 (47.6%)
転居	163 (5.4%)
長期不在	31 (1.0%)
一時不在	268 (8.9%)
住所不明	40 (1.3%)
拒否	864 (28.8%)
その他	62 (2.1%)

標本抽出法

母集団：全国の市区町村に居住する満 16 歳以上 49 歳以下の男女 3000 人を対象に、層化二段無作為抽出法が採られた。層化にあたっては、下記のように進めた。

【層化】

1. 全国の市区町村を都道府県を単位として以下の 11 地区に分類した。

北海道地区＝北海道	(1 道)
東北地区＝青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県	(6 県)
関東地区＝茨城県、栃木県、群馬県、埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県	(1 都 6 県)
北陸地区＝新潟県、富山県、石川県、福井県	(4 県)
東山地区＝山梨県、長野県、岐阜県	(3 県)
東海地区＝静岡県、愛知県、三重県	(3 県)
近畿地区＝滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県	(2 府 4 県)
中国地区＝鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県	(5 県)
四国地区＝徳島県、香川県、愛媛県、高知県	(4 県)
北九州地区＝福岡県、佐賀県、長崎県、大分県	(4 県)
南九州地区＝熊本県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県	(4 県)

2. 各地区においては、さらに都市規模によって次のように4分類し、それぞれを第一次層として計46層とした。

○大都市：(東京都区部、札幌市、仙台市、千葉市、横浜市、川崎市、名古屋市、京都市、大阪市、神戸市、広島市、北九州市、福岡市)

○人口10万人以上の都市

○人口10万人未満の都市

○町 村

(注) ここでいう都市とは、平成14年4月1日現在による市制施行の地域である。また、人口による都市規模の分類は、平成13年3月31日現在、住民基本台帳に基づく『住民基本台帳人口要覧』(自治省行政局編)によった。

【標本数の配分及び調査地点数の決定】

地区・都市規模別各層における推計母集団数の大きさにより、それぞれ3,000の標本数を比例配分し、各調査地点の標本数が13~23になるように調査地点を決めた。

(68-1) 男性											n	
地域												
	北海道	東北	関東	北陸	東山	東海	近畿	中国	四国	九州	不明	
合計	5	8	26	6	5	13	13	13	13	13	12	675
F 2 年 齢	20歳未満	14	6	6	10	10	10	10	10	10	26	63
	20~24歳	11	11	33	5	8	8	8	8	8	16	62
	25~29歳	10	10	31	6	6	6	6	6	6	14	102
	30~34歳	10	10	31	8	7	7	7	7	7	9	107
	35~39歳	5	7	28	6	5	5	5	5	5	11	110
	40~44歳	6	11	20	5	4	4	4	4	4	9	124
	45歳以上	7	9	29	5	4	4	4	4	4	10	107

(68-2) 女性											n	
地域												
	北海道	東北	関東	北陸	東山	東海	近畿	中国	四国	九州	不明	
合計	4	10	28	5	5	5	5	5	5	5	13	897
F 2 年 齢	20歳未満	4	7	26	4	4	4	4	4	4	23	73
	20~24歳	4	8	28	6	10	10	10	10	10	17	89
	25~29歳	4	8	33	3	4	4	4	4	4	13	124
	30~34歳	5	9	33	4	4	4	4	4	4	7	145
	35~39歳	5	8	24	4	6	6	6	6	6	13	142
	40~44歳	4	14	31	9	9	9	9	9	9	12	145
	45歳以上	12	24	4	4	4	4	4	4	4	16	179

II 調査結果の概要

1. 回答者の背景

(1) 性別と年齢

男性 675 名、年齢は 16 歳から 49 歳で平均年齢 34.0 ± 9.5 歳、女性 897 名、16 歳から 49 歳で平均年齢 35.5 ± 9.5 歳。

(2) 職業

男性では 7 割が勤め人（常勤職）であり、自営業 12%、学生 11% であるが、10 歳代では学生が 9 割を占めていた。女性は勤め人が 3 割、主婦 27%、勤め人（非常勤）24%、学生 10% であり、10 歳代では学生が 9 割、20 歳代は約半数が勤め人（常勤職）であり、30 歳代は 4 割が専業主婦で、40 歳を越えると 4 割弱が、パート職が主体となっていた。わが国の年代別就労状況がよく反映されていたと考える。

職業		勤め人 (常勤)		勤め人 (非常勤)		自営業		学生		主婦 (主夫)		無職		不明		n	
合計		70		4		12		11								675	
F2 年齢	20歳未満	92												63			
	20~24歳	10		8		29										62	
	25~29歳	73		12		7										102	
	30~34歳	84		8		3										107	
	35~39歳	78		19												110	
	40~44歳	80		15												124	
	45歳以上	74		22												107	
合計		30		24		7		10		27						897	
F2 年齢	20歳未満	91												73			
	20~24歳	50		18		26										89	
	25~29歳	50		14		4		26								124	
	30~34歳	29		21		6		39								145	
	35~39歳	21		23		8		45								142	
	40~44歳	22		40		10		27								145	
	45歳以上	26		32		12		29								178	

(3) 配偶者の有無

配偶者の有無についてみると、男性では「配偶者あり」が全体で 57.3%、10 歳代は皆無、20 歳前半 4.8%、20 歳後半 35.3%、30 歳前半 56.1%、30 歳後半より 5 歳階級毎で 8 割弱から 9 割弱となっていた。恋人ありが 10 歳代で 27.0%、20 歳前半 48.4% であった。一方女性は、配偶者ありが全体で 63.5% と男性に比べ 6.2 ポイント高いも有意な差ではなかった。各年代別では、男性よりもやや高い値を示しているもののほぼ同じような傾向であった。

(4) 子供の有無

また、家族構成としての子どもの有無は、男性で 51.3% が子どもを有しており、1~4 人で平均 2.1 ± 0.8 人、年齢が上がるにつれ子どもを有する比率は高い。女性は 62% が子どもを有しており 1~6 人で平均 2.1 ± 0.8 人で、男性同様年齢と共に子どもを有する比率は上

昇していた。

		(68-1)男性				(68-2)女性			
		F3 子供の有無				F3 子供の有無			
		いる	いない	不明	n	いる	いない	不明	n
合計		51		47	675	62		36	897
F2 年齢	20歳未満	100			63	100			73
	20~24歳	98			62	4	96		89
	25~29歳	24	76		102	37	62		124
	30~34歳	51	48		107	66	33		145
	35~39歳	67	30		110	82	15		142
	40~44歳	80	17		124	86	11		145
	45歳以上	87	9	4	107	94		4	179

あなたの日常の生活や考え方についてお伺いします。

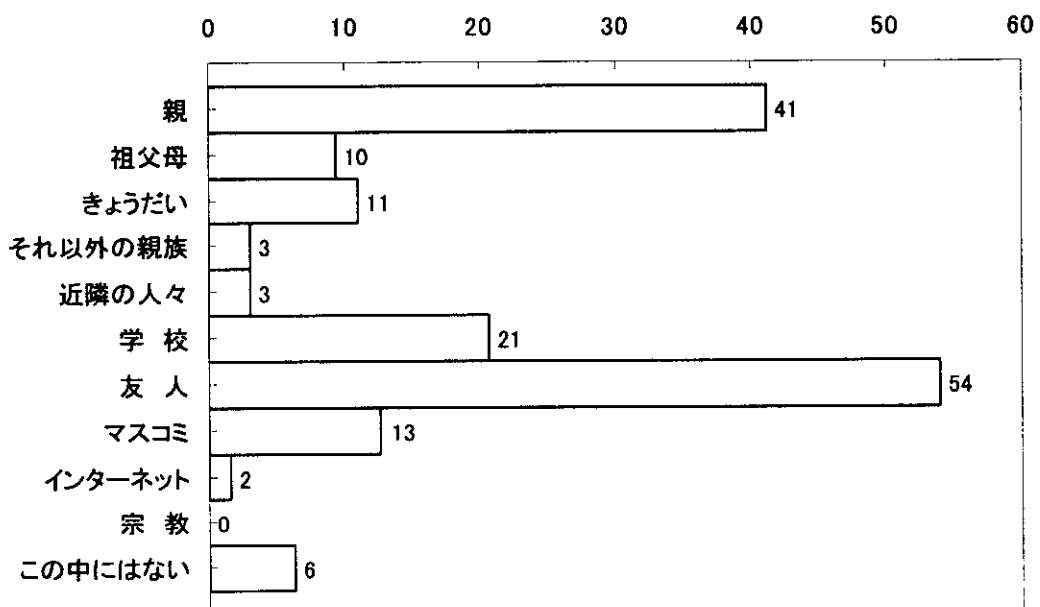
(1) 行動や考え方で最も影響を受けたもの (○は2つまで)

「最も影響を受けたもの」を尋ねると、男女ともに「親」(男 60.6%、女 75.8%)、「友人」(男 44.7%、女 46.5%)の順であった。三番目に影響を受けたものは男性が「マスコミ」(16.1%)、女性は「きょうだい」である。これを年齢で見ると、男性の場合、親を挙げる者が「35歳～39歳」が69.1%と最も高いが、一方20歳未満は41.3%と最も低かった。女性では「25歳～29歳」が82.3%と最多であるが、「20歳未満」では54.8%に過ぎなかった。若い男性は、年長者に比べて「友人」が占める割合が高く、「20歳～24歳」が58.1%、「20歳未満」が54.0%であった。女性でも「友人」の割合が若い世代で高かった(「20歳～24歳」62.9%、「20歳未満」61.6%)。「学校」を挙げる者が「20歳未満」の男性で20.6%、女性で17.8%存在することは他の年齢に比べて際だっており、「学校」あるいは「学校教育」などが「マスコミ」(男性12.7%、女性15.1%)以上に、20歳未満の男女の生活や考え方に影響を及ぼしていることがわかった。

(68 - 1) 男性

20歳未満

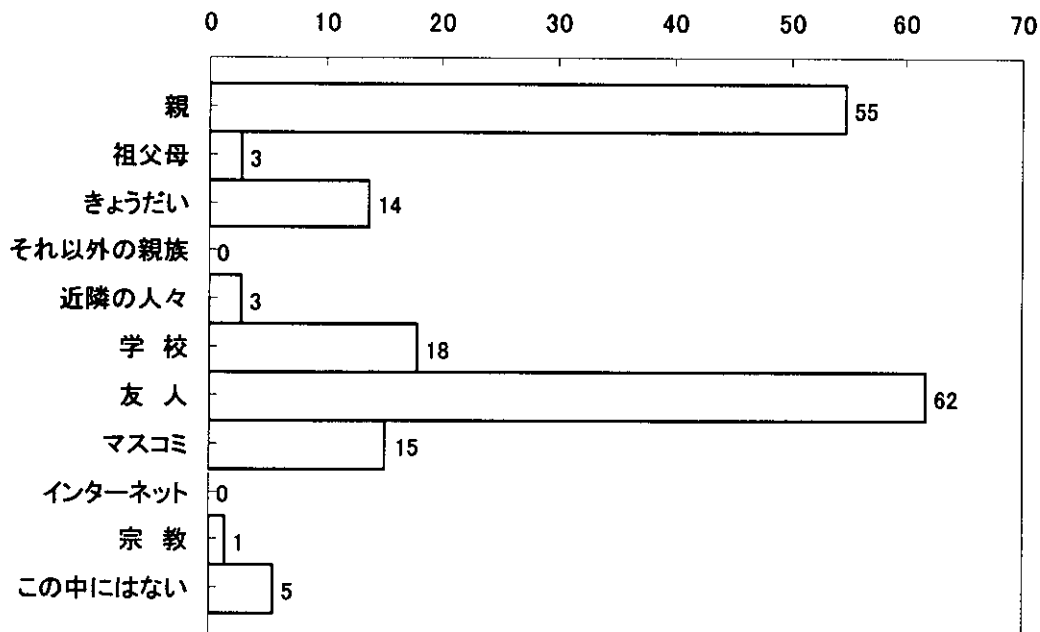
n = 63



(68 - 2) 女性

20歳未満

n=73



(2) 相談できる人は何人いるか (○は1つ)

男女とも「3人」を挙げた者が最も多く、男性で 20.7%、女性では 19.8%であった。「誰もいない」と回答した男性は 4.0%、女性で 1.6%と、男性に多くみられた。中でも男性では「20歳～24歳」が 8.1%と、多くの年齢層に比べ 2 倍から 3 倍であった。

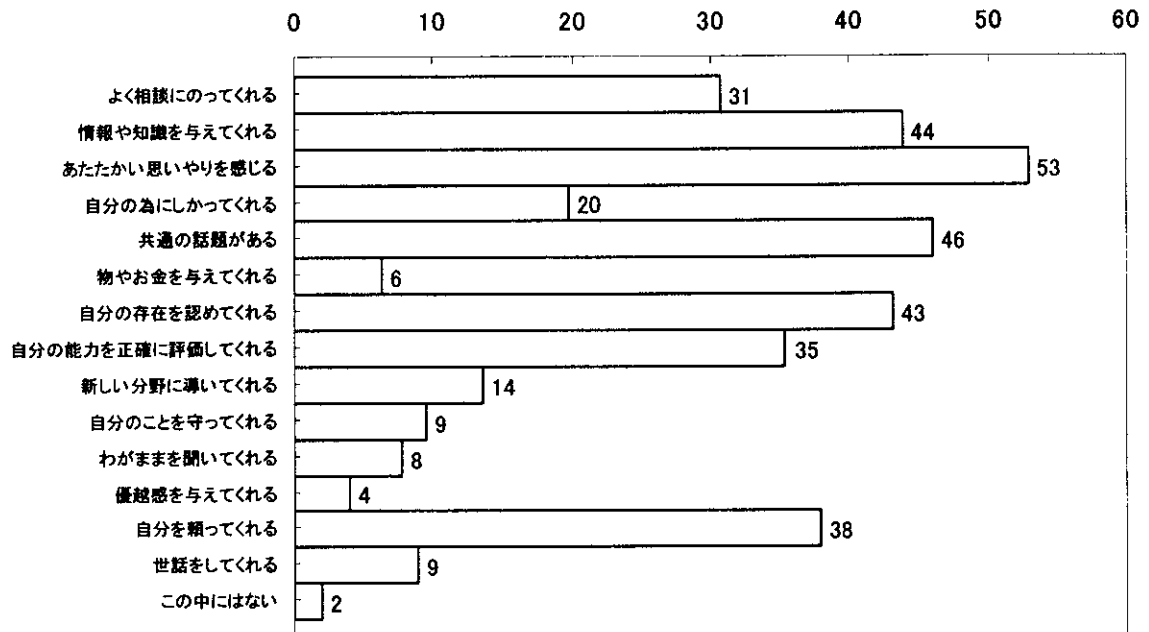
(3) 人間関係で喜びを感じる時 (○はいくつでも)

男性では「あたたかい思いやりを感じる」(52.9%)、「共通の話題がある」(46.1%)、「情報や知識を与えてくれる」(43.9%)、「自分の存在を認めてくれる」(43.1%)、「自分を頼ってくれる」(37.9%)、「自分の能力を正確に評価してくれる」(35.4%)などを挙げている。年齢での第一位をみると、「20歳未満」では「あたたかい思いやりを感じる」(57.1%)、「20歳～24歳」(50.0%)、「25歳～29歳」(53.9%)は「共通の話題がある」、30歳以降では「あたたかい思いやりを感じる」を人間関係で喜びを感じる」と回答した。

一方、女性については、「あたたかい思いやりを感じる」(70.0%)が断然高く、「自分の存在を認めてくれる」(55.2%)、「共通の話題がある」(51.8%)、「よく相談にのってくれる」(45.5%)、「情報や知識を与えてくれる」(41.1%)などを挙げ、男女の違いがみられる。年齢での差は顕著ではないが、「20歳未満」では特に「自分の存在を認めてくれる」(60.3%)が目立った。

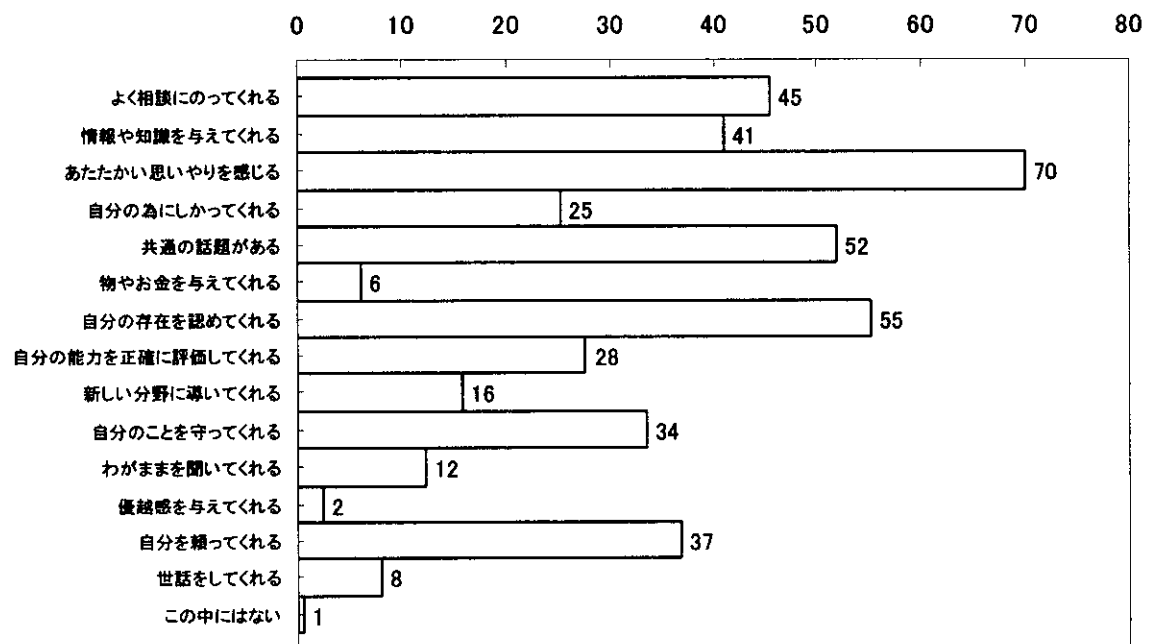
男性

n=675



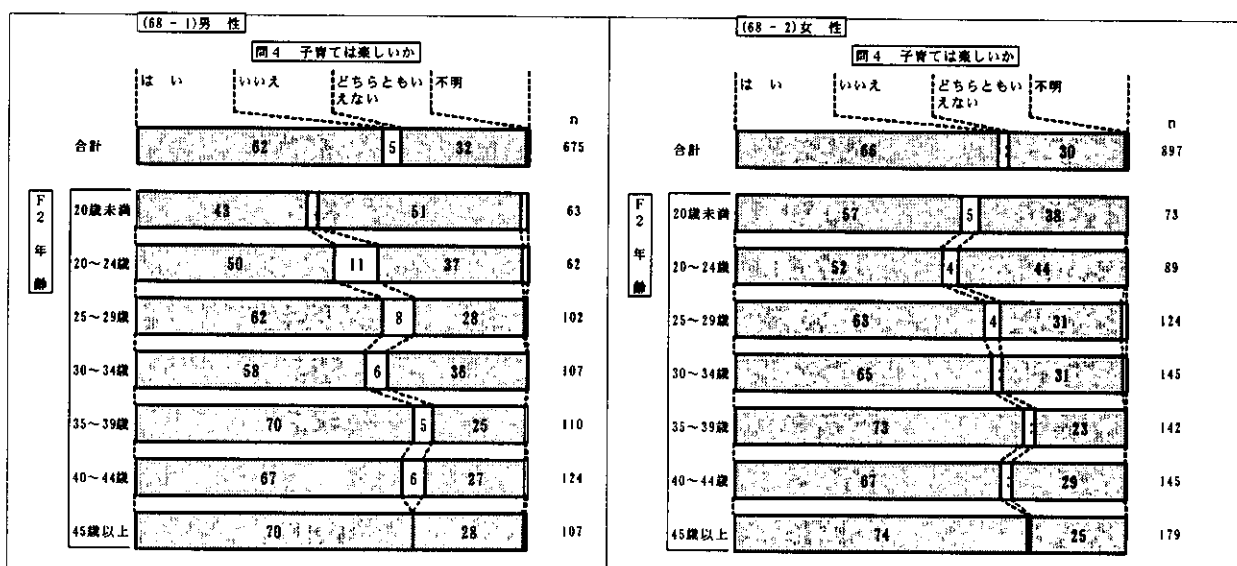
女性

n=897



(4) 子育ては楽しいか (子育ての経験がない方はイメージ) (○は1つ)

「はい」の回答は男性で61.9%、女性では66.3%であるが、肯定的か意見は高年齢層多く、一方「20歳未満」は42.9%と最も少なかった。女性も同様な傾向を示しており、実際に子育て経験を持っていると思われる男女は肯定的であり、子育てをイメージで捉えている若い世代は「どちらともいえない」など意見を表明することにためらう傾向がみられた。気になるのは、「20歳～24歳」の男性の11.3%が否定的、女性では肯定派が51.7%と、他の年齢層との差があり、実際に子育て最中としての思いなのか、イメージなのかを更に踏み込んで検討する必要がある。



(5) 女性と仕事について (○は1つ)

男女ともに、「子どもが大きくなったら再び仕事を持つ方がよい」(男性31.0%、女性31.9%)、「パートタイムに切り替えるなど負担を軽くする方がよい」(男性20.0%、女性24.1%)などを挙げている。年齢別にみた違いは、「20歳未満」の男性の19.0%が「子どもが生まれても仕事を続けるべきだ」と主張し、「女性は仕事をしないほうがよい」(7.9%)とも回答し、現実の問題になっていない世代の揺れを感じる結果となっている。「男性が家事や育児を担当すること」には、男性の「20歳未満」(14.3%)、女性では「20歳～24歳」(15.7%)、「30歳～34歳」(13.1%)で概して支持が多かった。

(6) 今の生活で不満に思っていること (○はいくつでも)

「お金がない」を男女ともに第一位に挙げ、それぞれ49.0%、47.7%。次いで「時間がない」(男性39.9%、女性30.2%)と続く。年齢で見ると、男性の「34歳以下」が「お金がない」、「30歳以上」が「時間がない」の選択割合が概して高く、世代の違いによる悩みが浮き彫りされた。女性では、「20歳未満」が「時間がない」ことを不満に感じている割合が他に比べ際だっていた。「恋人や配偶者がいない」については男女ともに「29歳以下」で多い

が、男性では「30歳～34歳」が11.2%ともう一つのピークを作っていた。「自分の学校・受験・進学」への不満が「20歳未満」の男女で多いのは当然であろう。

(7) 初めて人を好きと感じた(初恋)時期。(○は1つ)

「小学校高学年」を挙げた男女が最も多かった(男性35.3%、女性34.4%)。女性の2割以上が「3歳から5歳くらいの間」に初恋をしたと回答している。男性の「24歳以下」では、「中学のとき」(31.7%)を挙げる例が多いことから、初恋の低年齢化は女性において顕著であることがわかる。

		(68-1)男性							(68-2)女性										
		問7 初恋はいつか							問7 初恋はいつか										
		3歳から5歳くらいの間	小学校低学年(1~3年生)	小学校高学年(4~6年生)	中学のとき	高校のとき	高校卒業以後	この中にはない	不明	n	3歳から5歳くらいの間	小学校低学年(1~3年生)	小学校高学年(4~6年生)	中学のとき	高校のとき	高校卒業以後	この中にはない	不明	n
合計		10	24	35	19	4			675	12	24	35	19	4					897
F2 年齢	20歳未満	13	17	27	32	5			63	22	25	28	15						73
	20~24歳	16	18	16	27	5			62	24	27	21	15	6					89
	25~29歳	14	33	29	17				102	15	28	35	15						124
	30~34歳	10	30	38	9	4			107	17	27	32	13	4					145
	35~39歳	14	24	43	13				110	10	32	36	13	5					142
	40~44歳	6	21	41	23				124	5	23	41	22	4					145
	45歳以上	18	37	22	9				107	13	41	32	6						179

(8-1) 両親は仲が良かったか (○は1つ)

男女ともに「良かった」と36.3%、37.2%が回答しており、「どちらかといえば良かった」と合わせると、男性の68.3%、女性の65.3%となっている。「よかった」と回答した割合は、男性では「20歳未満」(49.2%)と「25歳～29歳」(56.9%)に山があり、女性では「20歳～29歳」で4割を超えていた。「どちらかといえば悪かった」と「悪かった」を足した割合は男性で14.1%、女性では14.3%と同等であるが、概して男性の「20歳～24歳」(16.2%)と「30歳～34歳」(18.6%)、「45歳以上」(16.8%)とばらついており、その理由を推測することはできない。女性では「30歳～39歳」で16%程度と概して高かった。

(8-2) 普段、親と話をしていたか。(○は1つ)

「よく話をした」と「時々話をした」を加えて「話をした」群で見ると、男性87.0%、女性91.5%と高率であり、親と子の隔絶を感じさせるデータとはならなかった。とりわけ、「20歳未満」では男女ともに、それぞれお60.3%、68.5%と他の年齢に比べて「よく話をした」割合が高く、一方、「よく話をした」が最も低いのは男女ともに「45歳以上」で、特に男性

は 19.6%と驚く程に低い結果であった。日常における親子のコミュニケーションは、現代の方が図られている可能性が高い。問題は、親子間の会話に慣れていない世代が親となっているわけで、「子」からの一方的な親への働きかけとなっていないか危惧されるところだ。

(68-1) 男性					(68-2) 女性						
問8(2) 普段、親との話					問8(2) 普段、親との話						
	よく話をした	時々、話をした	ほとんど話をしなかった	まったく話をしなかった	不明		よく話をした	時々、話をした	ほとんど話をしなかった	まったく話をしなかった	不明
合計	42	45	11			n	58	34	7		n
F2											
年齢											
20歳未満	59	32	5			63	69	26	5		73
20~24歳	42	44	11			62	61	33	6		89
25~29歳	58	30	10			102	65	28	6		124
30~34歳	37	48	13			107	57	31	10		145
35~39歳	44	43	11			110	57	37	8		142
40~44歳	40	50	9			124	52	37	9		145
45歳以上	20	61	15			107	51	39	9		179

(9) 親をどのように思っているか。(○は1つ)

母親に対する意識としては、5割を超える男女が「産んでくれて、育ててくれて、感謝している」(男性 52.1%、女性 57.1%)と回答し、その傾向は年齢が上がるにつれ高い。次いで男性の 14.5%、女性の 14.3%が「好き、嫌い両方の気持ちがあり複雑」としている。このように男女間の差は認められない。年齢で見ると、男女ともに、「20歳未満」で「好き、嫌い両方の気持ちがあって複雑」(男性 30.2%、女性 24.7%)が他の年齢に比べて高率であり、日常的に互いの利害関係がぶつかり合っている最中のホットな母親・子関係を伺わせる。また、女性の「30歳~39歳」では「好き、嫌い両方の気持ちがあって複雑」と16~18%が回答しており、実際に子育てしている可能性のある世代の親側の思いが反映した結果ともいえる。

一方、父親に対しては、「育ててくれて、感謝している」気持ちは母親に向けられる思いほどには高くなく、男性 45.3%、女性 43.4%であった。年齢の特徴としては、母親に対してと同様、男性の「30歳~39歳」で「支えなくてはけない存在」と評価しており(11%台、母親では30歳~44歳で10~13%)、同居か別居かの揺れを感じさせる。「嫌い、うっとうしい」が、女性の「20歳未満」で9.6%と著しく高く、「嫌い、うっとうしい」と感じる割合の低い母親との違いが浮き彫りされている。この世代の娘に対する父親の干渉が、このような意識をもたらしているのだろうか。

性の意識や知識についてお伺いします。

(10) 親と性に関する話をしたか (するか) (○は1つ)

問8のように、日常的な親子の会話が高率に持たれているにもかかわらず、殊「性」ともなると、「よく話をした」「時々、話をした」割合が激減し、男性の7.0%、女性の10.7%。「まったく話をしなかった」がそれぞれ57.0%、47.0%であることを考慮すると、いかの「性」について日常的に話をすることが難しいかがわかる。中でも、男性の30歳以上、女性の40歳以上は、「よく話をした」が皆無であることは興味深い。一方、女性の「20歳未満」では23.2%が「話をした」と回答しており、親子のコミュニケーションという意味では、若い母親、娘関係では良好な印象を受ける。「性」がテーマであっても、親子の会話が図られている現代の若い女性が、母親となったときに、子どものような関わりが始まるのか興味は尽きない。

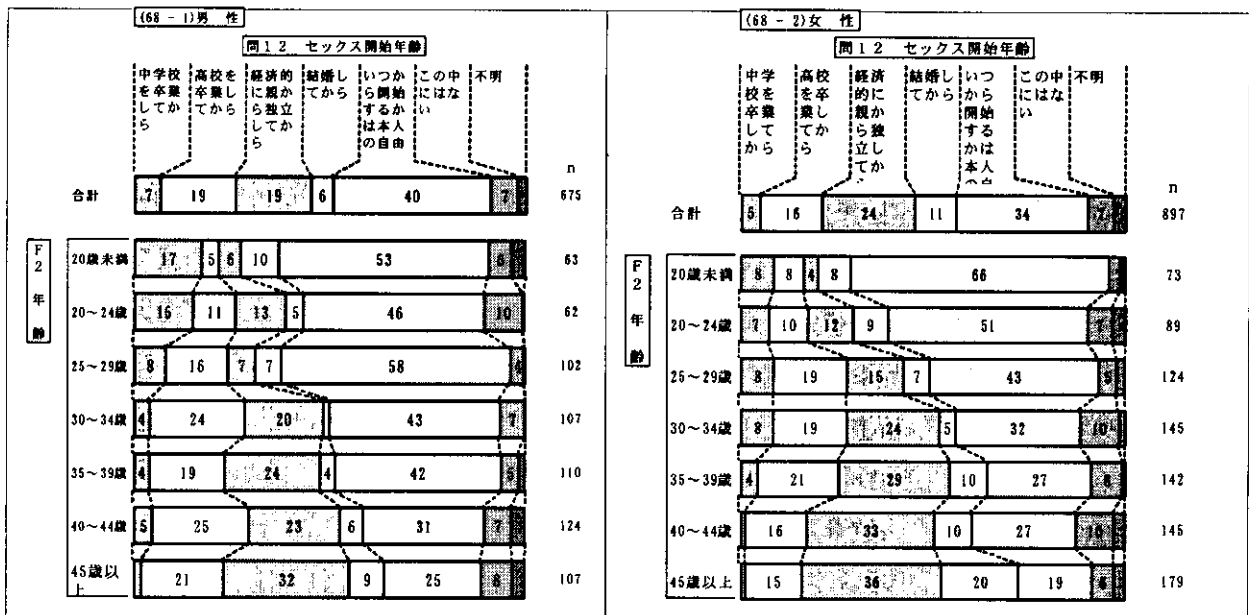
		(68-1) 男性					(68-2) 女性				
		問10 親と性に関する話					問10 親と性に関する話				
		よく話をした	時々、話をした	ほとんど話をしなかった	まったく話をしなかった	不明	よく話をした	時々、話をした	ほとんど話をしなかった	まったく話をしなかった	不明
合計		5	35		57		10	40		47	
F2 年齢	20歳未満	6	37		52		21	38		37	
	20~24歳	6	8		32		12	43		42	
	25~29歳	5	9		37		10	37		49	
	30~34歳	8			39		13	34		50	
	35~39歳				39		7	42		50	
	40~44歳	4			34		10	42		45	
	45歳以上				26			45		50	
											n
											675
											897
											73
											89
											124
											145
											142
											145
											179

(11) 親は性に厳しかったか (○は1つ)

「性に厳しいか」の問には「どちらともいえない」が男女ともに高く (男性41.0%、女性37.7%)、次いで男性では「厳しくなかった」(23.3%)、女性では「どちらかといえば厳しかった」(25.8%)と続く。ジェンダーを感じさせる回答である。「厳しかった」と「どちらか」というと厳しかった」を加えると、この傾向は更に顕著であり、男性20.7%、41.6%となっている。年齢で見ると、女性の「20歳未満」に「どちらともいえない」が58.9%と高いものの、「厳しかった」(9%)、「どちらか」というと厳しかった」(8.2%)と低く、「厳しく育てるのが面倒」というような、最近の親子関係の変化を物語る結果となっている。問8で、親と「普段話をしている」割合が高いにもかかわらず、「厳しくない」という点については、「厳しければ話をしない」とも言い換えることができないだろうか。

(12)セックス開始年齢

男女ともに、「いつから開始するかは本人の自由」(男性 41.6%、女性 34.1%)を挙げる例が多かった。これは、あたかも物わがりのよい親子の意見とも言えなくはないが、親子間でのコミュニケーションを図ることが面倒なので「適当に」という投げやりの姿も見える。年齢で比較すると、男性では、「経済的に親から自立してから」が30歳以上に多く、特に「45歳以上」では31.8%に達していた。一方、「中学校を卒業してから」が「20歳未満」(17.5%)、「20歳～24歳」(14.5%)と高く、「いつから開始するかは本人の自由」が「29歳以下」で高率であることなど、親の世代は「子ども」を思い、若い世代は「自分の行動の正当性」を主張しているようで興味深い。女性についても、同様な傾向が認められた。



(13) 友人と性に関する話をするか (○は1つ)

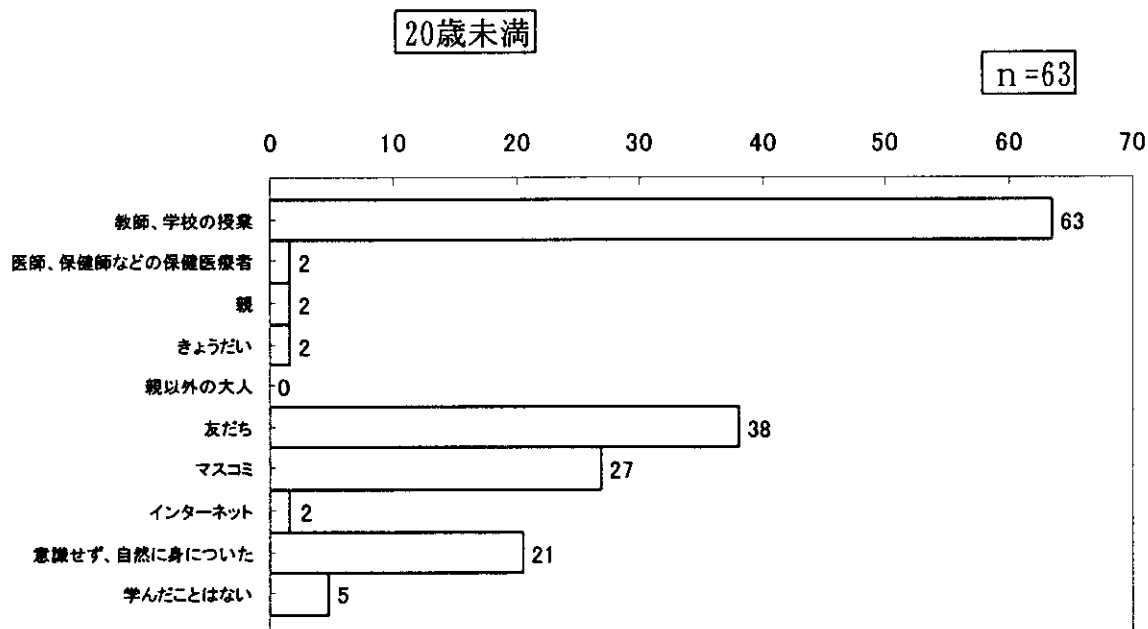
問10では、親子が「性」をテーマに話をすることは極めて稀とい結果を得たが、友人となると、「よく話をする」「時々話をする」が男性では55.1%、女性の56.8%と高かった。「よく話をする」に特定すると、男女ともに、若年程そのチャンスが多く、「20歳未満」では男性28.6%、女性20.5%と群を抜いていた。ただし、最近の若者達の「友人」像には大きな変化があり、例えば「メール」の友人、「クラブ活動」の友人というように、使い分けており、このような問いかけ自身が回答に窮するものとも言える。

(14) 性や避妊方法の情報源 (○は2つまで)

「性や避妊法などに関する情報源」を問いかけると、男性では「友人」(53.3%)と「マスコミ」(48.6%)が圧倒しており、次いで「教師、学校の授業」(26.8%)となる。女性の場合、「教師、学校の授業」が42.8%、「マスコミ」43.3%、「友人」41.6%と三者が拮抗している。年齢的にみると、男女ともに「20歳未満」のうち男性の63.5%、女性の69.9%が「教

師、学校の授業」を挙げ、「友人」(男性 38.1%、女性 43.8%)、「マスコミ」(男性 27.0%、女性 28.8%)をはるかに凌いでいた。特に「教師、学校の授業」を挙げる回答者は年齢が下がるにつれ高いという結果であった。

(68 - 1) 男性



(68 - 2) 女性

